「山月記上演」－南部圏域福祉施設支援事例報告会の記録－

・挨拶と報告の概要

本日の報告は「社会福祉法人　薫風会」デイサービス施設「弥生苑(やよいえん)」の施設長である私が行います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

さて「当報告会」の構成は「質疑応答を含む 1 時間の事例報告 2 本」と、決まっておりました。

ところが、本例は「報告」だけでも 1 時間半はかかりそうなんで、事前に「報告会」の座長である「にこにこ苑」の施設長さんに相談しましたところ

「予定を変えてでも全部報告すべきや。今回はこれ一本で行きましょう」

という御意見をいただきましたので、本日はこれ一本でいきます。

実際の報告は 3 部に分かれております。

1 部は、今回の報告対象者である「当苑利用者で認知症患者Ａさん」の「来所動機」と「当苑での生活」の紹介。

2 部は、「演劇」のビデオ上映。

3 部は、「演劇」上演の裏話や後日談です。

なお、Ａさんが書いた**「私の半生と御願い」**は、全文を**「添付資料」**として「配布プリント」に綴じておりますので、**1 部**と **2 部**の間の休憩時にざっと目を通しておいて下さい。

なお**「私の半生と御願い」**を公開すること、文章に分かりやすくするための「小見出し」をつけることについてはＡさんの許可を得ています。

では**1 部**からスタートします。

1 部「Ａさんの来所と日常生活」

・Ａさんの略歴

本人の書かれた**「私の半生と御願い」**と重複しますんで簡単に述べます.

Ａさんは県北の「津群郡置上町」(つむれぐんおきがみまち)出身で現在満 60 歳。

地元の小学校を出て、中・高は県都にある有名進学校に進み、東京大学校に現役で入学。

中学から大学卒業までの成績は体育以外、全て学年一番で、奨学金をもらっていたため月謝は一度も払ったことがなく、その神童ぶりは地元新聞で報道されたほどです。

世の中にはこんな賢い人もいるんですね。

大学卒業後はアメリカの大学へ留学し、「修士号」を取得。

帰国して「一流商社」に入社し、ニューヨーク支店に赴任、支店の業績を随分伸ばしたそうです。

赴任中に結婚し、女の子二人に恵まれ、帰国して東京本社に勤務。

ここまでは、順風満帆、まさに「超エリート」という感じですが、36 歳の時に「商社」を突然退職し、自分の会社を立ち上げます。

アメリカに出張し、一生懸命営業しますが、残念ながら売上が伸びず、2 年後には会社をたたみ、元上司の紹介で退職した「一流商社」の「子会社」に恥を忍んで入社します。

その「子会社」は当地にあることから、結果的に生まれた県に「里帰り」することになりましたが、「都落ち」という感じは否めません。

・認知症の発症

「子会社」在籍 15 年目の 55 歳の時、Ａさんは認知症を発症し会社を退職。

通院治療を受けておられたようですが、症状が悪化し、自宅のみでの生活は無理になり、半年ほど前相談支援センターの紹介で当苑の体験利用を経験されたところ、当苑が気に入られたようで「週三日のデイサービス契約」を結びました。

苑に来られて「定時の体操」や「昼食」は他の利用者と一緒に行いますが、カラオケやダンス等のリクリエーション、遠足や買い物など行事には参加されません。

「居眠りをしたり」「ぼ～としている」時以外はテレビを見るか図書室で読書されておられます。

交友関係もほとんどないんですが、唯一の例外はＢさんです。Ｂさんは、74 歳の認知症女性ですが「ロリータファッション」が大好きで、いつもフリルのいっぱいついた服を着ておられます。

Ａさんが亡くなった父親によく似ているそうで「とおさん。とおさん」と呼び掛け「Ａさん」に寄り添って座り、手を握ったりして、甘えるんですが、Ａさんも拒否することなく受入れているところをみると案外気が合っているのかもしれません。

認知症にはいくつかのタイプがありますが、その中の「脳血管性認知症」では「認知機能」が「正常な状態」と「低下した状態」を繰返しながら病状が悪化していく例が多く、Ａさんの病状にもその傾向(まだら認知症)が見られます。

また、Ａさんは「認知機能」が正常に戻った時「症状がひどい時にやってしまった失敗」を悔いて「うつ症状」に陥ることが多々あります。

来所当初は病気を克服しようという気持ちが強く、「何かにつけメモを取ることで認知機能が低下した状態を防げるのではないか」と考えられておられたようですが、努力の甲斐なく、症状は進行し「認知機能が低下した時間」が増加してきました。

「正常な状態時の集中力低下」も著しくなり、食事もたびたび中断、失禁も多くなりました。

時間の感覚も徐々になくなって来ているようで、帰宅時間を忘れることも増え、最近ではメモを取ることもなくなりました。

普通、認知症が進むと感情・要求の抑制障害が起こり、怒ったり、泣いたりすることが多くなるのですがＡさんはまだその傾向はありません。

・大事件

そんなＡさんが 3 か月ほど前、大事件をおこしました。

いつものように利用者グループから離れて図書室で本を読んでいた時、何の前触れもなく、突然大声で泣き始めたのです。それも施設の職員の全員が、分かるほどの大声で！

近くにいたＢさんもびっくりして、

「とおさん、どうしたの、どおしたの」

と、泣きながら縋り付いたほどです。

駆けつけた職員が、

「Ａさん大丈夫か？」「どこか痛いんか？」「横になるか？」

と、口々に声をかけると、Ａさんは泣きながらも

「Ｂちゃん、職員の皆さん、これはうれし泣きです。決して迷惑はかけません。泣かせてください」

と、言って部屋の隅にゆき、より大きな声で泣き続けるので、職員は近くに集まって見守っていました。

20 分くらいすると泣声がだんだん小さくなってきて、40 分くらいで泣きやみ、その後は大声で泣いた反動からか、昼食時間まで、項垂(うなだ)れて一言もしゃべろうとしません。

昼食を知らせるチャイムが鳴り始めると、ようやく顔をあげて、今度はじっと壁にはってある文化祭のポスターを見つめていましたが、5～6 分すると突然立ち上がり、食堂に行き、昼食を完食。

恐る恐る近づいてきて語りかけるＢさんに穏やかに返答し、午後はいつものようにテレビを見たり、居眠りをしたりして平穏に過ごして、定時帰宅しました。

・Ａさんの決意

翌日、Ａさんは来所と同時に、私を呼び出して、

「私がいつも座っている机にメモを張り、パソコンを置きたいんですが、許可してくれませんか？」
と、言われますので、許可したところ「私の半生と御願いを書く」と記した紙を張りました。
その日の午前中はずっとその場所にいて、持ってきたパソコンで、作文をしておりました。
それ以後は、2～3 時間作文をする日もあれば、本を読んだりして何もしない日もあります。
約 1 か月間、作業を断続的に行った後「私の半生と御願い」(添付資料）と「仮台本」を持ってきました。

・支援会議

Ａさんは「私の半生と御願い」と小説のコピーに線を引いただけの「仮台本」を私に渡し、
「一か月後に実施される苑の文化祭で自分が主役で中島　敦原作の山月記を上演してほしい」
と、懇願しました。
目前に迫った「文化祭のプログラム中」に「山月記の劇」を突っ込むというかなり無理な要求を通すためには、
「自身の生い立ちから発症前、発症後の心境の変化を克明に記し、それが要求の動機に繋がることを示すことが必要だ」とＡさんは思ったのでしょう。
健康であれば口頭で伝えられることも、病気のために正確に伝える自信がないので、長時間かかって文章を作成したのです。
私は早速Ａさん担当の支援員とケアマネージャー、文化祭の担当職員を集め「支援会議」を開き上演の可能性を検討し、既に決まっていた文化祭の出し物の時間を少しづつ削り 30 分の上演時間を確保しました。

・「カントク」の登場

舞台の演出について支援員から「カントクが適任だ」という声が上がりました。
「カントク」とは職員がつけた愛称で、県都にある「地方テレビ局」で「ディレクター」を務めていた人物のことで、定年退職後は「弥生苑」と同じ敷地にある「特養」に入所しています。
本人の話では、同局は慢性的な「予算不足」「人手不足」だったため、本業の「ドキュメンタリー」や「グルメ番組」の制作以外に「スタジオセットの作成」「録音」「音響効果」「照明」「大道具、小道具」なんと「アナウンス」まで、テレビマンが分担する仕事を一通りこなしたそうです。
「ドキュメンタリー制作」では全国レベルの賞を何回も受けていて県内より東京での評価が高く、彼を慕って県外から同局に入社した若者もいるほどです。
重度の糖尿病を患っているため週 3 回人工透析を受けており、歩行は少し困難ですが「運動会」では「音声システム機器の組立、操作」「記録撮影」を担当。
「文化祭の劇」では「台本」と「演出」「舞台セットつくり」までやってくれます。
会議翌日の朝食後「カントク」に「私の半生と御願い」と「仮台本」を渡し、夕方意向を聞いたところ
「Ａさんの心意気に惚れ込んだ、台本、演出、音響、舞台装置は全て任せといてくれ」
と、全面協力を快諾されました。

・「カントク」の演出プラン

「カントク」は、本格的な劇の演出をすることにかなり気合が入ったらしく、早速、演出プランを話し始めました。
「原作では山道で人を襲おうとした虎が、旧友と気付き、虎に変わった姿を見られまいとして、草むらに隠れ、姿を見せず旧友と会話するのであるから、舞台に薄(すすき)の壁を作り、虎役のＡさんがその前で友人を襲いかけて、すぐ薄の後ろに隠れ、裏に設置した椅子に座り、台本に従って壁の外の友人と話し、最後に壁から出てきて吠えればよい。」
「Ａさんの姿は舞台の後ろから暗めのスポットをあて、虎が岩に座っているような姿をシルエットで映し出す。椅子の前に岩の形をした作り物を置き椅子を隠す。書見台も岩と重なって客席からは判別できないようにする」
「Ａさんは台本と自分の人生を重ね合わせて感情込めて読むから、舞台稽古をする必要はなし。それでもちゃんと劇になる

んや」

「久しぶりに本格的な劇を演出できるので楽しみや。劇の途中でＡさんの状態が悪うなってもうまく対応するから心配せんでもええ。そのほか随所に隠し玉を用意しておくので楽しみにしてくれ。この作品を自分の人生の集大成にするつもりや」と、力強く宣言してくれました。

そして、

「大丈夫、セリフはほんの少しやから」

と、言ってなんと「迷優」の私を李徴の友人役に指名したのです。

開演時間については、担当支援員と相談し「Ａさんの比較的状態の良い 14：30 から」としましたが、本人の当日の状態により弾力的に時間変更もできるそうです。

・上演までの準備

翌日、「カントク」と私は調子のいい時を見計らってＡさんを呼び出し「劇の上演が許可されたこと」「演出はカントクが行うこと」を告げました。

Ａさんは、感動して嬉し泣きし、何度も御礼を言いました。

「カントク」は、その日からがむしゃらに動き始めます。

一週間で台本完成させ、Ａさんに渡し、

「本番では椅子に座ってゆっくり台本を読んでもらえば劇は成立つようになってるから、稽古せんでもええよ」

と、諭すように話しました。

Ａさんはその時は承知したようにうなずいていましたが、我慢できなくなったようで調子のいい時は一人で稽古しています。

セットは、利用者の皆さんに手伝ってもらって作成し「虎の衣装」や「張りぼての岩」共々一週間で完成。

パワーポイントによる「聴覚障害者用字幕」は 3 日間、Ａさん以外の出演者とスタッフの稽古は 5 日間実施しました。

・上演当日

準備が終わりいよいよ当日になりました。

「フラダンス」や「カラオケ大会」などのプログラムも順調に進み、上演の 30 分前位になると、案内状を送っておいた「Ａさんの家族」「子会社の社長や元同僚」「Ａさんの親友の執行役員」がやってきました。

Ｂさんが期待に胸膨らませて最前列に陣取っていたことは言うまでもありません。

Ａさんの状態も良いようで、舞台袖で台本を見てセリフを確かめています。

ついに定刻になり幕が上がります。

いよいよ、当日のビデオを上映しますが、その前に休憩を 15 分とります。

添付資料１　－私の半生－

・少年時代

私は県の最北端「津群郡置上町」出身です。家族は両親と３歳年下の妹の計４人で、父は地元町役場に勤め、助役まで出世しましたが、退職後すぐに心臓マヒで亡くなりました。母は専業主婦、妹は短大を出て県都にある地方銀行に勤めていましたが、寿退社し、現在は大阪で暮らしています。

まず、最初に私の人生の方向性を決めた「思い出」を一つ紹介します。

私が小学生だった頃の置上町は、田舎ということもあり居酒屋などは一軒もなかったので、当時役場の中間管理職だった父は週末の夜になると「同僚や部下」を家に連れてきて宴会を催し、仕事で役場に来た「県の職員」や「国の出先機関の職員」も自宅でもてなしていました。

母は、宴会に備えて「酒肴と酒」を普段から用意し、宴席では遅くまで居座る客を接待していました。そんな宴席での話は聞きたくもないのに２階で寝ている私の耳に入ってきます。その内容というと、年度上半期は「上司や議員の悪口」「町民に対する誹謗、中傷、罵詈雑言」。下半期は「人事異動の予想」がそれらにプラスされるという「まったく下らない」もので、私はそんな「下らない話しかしない連中」を家に呼んで「喜んでもてなしている」父を軽蔑するようになり、公務員という職種にも嫌悪感を覚えました。

半面、昼間は家事に追われ夜は「下らない連中」の相手までさせられる母を心から同情し「就職してお金を儲けるようになったら母には楽な暮らしをさせてあげよう」と誓いました。私は母が大好きでした。父とは、ほとんど口をきかない代わりに、母には進学のこと、友人関係のことなど何でも相談しました。

自慢するわけではありませんが、私は地元でも有名な秀才で、成績は小学校１年生からずっと学年一番でした。6 年生の時、県都にある有名な中高一貫進学校の校長の強い誘いを受け、入試成績一番で合格し、小学校卒業と同時に地元を離れて、同校の学生寮に入りました。その後の中・高６年間の成績は常に学年一番でした。

・大学生時代

「地方で優秀でも秀才の多く集まる東京では、自分より上の人間が山ほどいる」と世間では言いますが、専願で受けた「東京大学校経済学部」に「最高点数」で合格し、4 年後「成績一番」で卒業したことから、自分の優秀さは全国レベルだということが分かりました。

私は、特に記憶力が抜群で一度覚えたことは何があっても忘れません。見聞きしたこと学んだことはすべて脳の中の棚にきっちり仕舞われていて、いつでも取り出すことが出来るので、授業を筆記する必要はないのですが、講義を聞きながら要点をまとめることは大好きなので、ノートはきちんととり、学友に貸したりしていました。

私の秀才ぶりは学外まで漏れ伝えられたようで、3 年生の秋頃になると所属が経済学部ということもあってか、当時の「通産省」と「経済企画庁」の人事担当者が大学にやって来て「是非、上級公務員試験を受け、自分のところに来てくれ」と懇望しました。

そのうちなんと大蔵省の人事担当者まで入省を打診しに来ました。

「私は経済を勉強しているんです。お宅の省に行くのは法学部の卒業生でしょう」

と、言うと

「大蔵省の職員は金の勘定だけしていてはだめだ。金融や投資に強い人材が必要だ。ぜひ来てくれ」

などと言っていましたが、幼いころから役人を軽蔑していた私に役所に入る気持ちは毛頭ない上、卒業後は一流商社に就職し、世界を股にかけて活躍するつもりだったので、誘いは全部断りました。

ちなみに一流企業の人事担当者は２年生の頃には、すでに接触してきていて、3 年生になると毎週のように「お会いしたい」との連絡がありました。私は、母に楽な生活をしてもらうためにできるだけ早く就職したかったのですが、4 年生になると指導教授はアメリカの大学へ留学することを強く進めるようになりました。

当時は今と違い指導教授の命令は絶対でしたので、仕方なくアイビーリーグの大学に2年間留学しました。しかし、アメリカに来てみると現地の生活にもすぐ慣れ、アメリカの最先端の経済学を学び、同級生との人間関係もできたので、留学は大成功でした。私は24歳で修士号を獲得して帰国しました。

・ニューヨーク支店時代

帰国後、就職難の時代でありながら一流商社の採用試験に合格し、新人研修もそこそこにニューヨーク支店に赴任します。最初は資源、次は穀物、最後は機械というように次々新市場を開拓しましたが、営業活動をする上で、留学先の「大学教官」や「同級生」の人脈が役に立ったことは言うまでもありません。出張が多く、めったに支店には顔を出しませんでした。母はそのあたりの事情を十分理解し、保存のきく「カップ麺」「缶詰」「干菓子」などが「励ましの手紙」と共に毎月支店に送られてきました。母の届物は、中・高一貫校の寮に入って以来のことで、故郷からどんなに遠く離れていても私のもとに送られてきました。しかし、父の差入や手紙が入っていたことは一度もありませんでした。

・ニューヨーク支店時代(結婚のこと)

支店時代のプライベートな出来事としては自身の結婚があります。私の学生時代は学問一筋、就職してからは仕事一筋の朴念仁で「遊び」には無縁でした。女性と付き合うこともなかったのです、29 歳の正月に帰省した時、母親から見合を勧められました。相手は、隣町出身で妹が勤めている銀行の同期生で、妹と同い年の 26 歳、昨年まで同じ独身寮に住でいた「仲良し」ということでした。

全然気乗りがしませんでしたが、母が「相手方の両親も強く希望している」と再三言うのに根負けし、正月明けに県都の一流ホテルまで出向いて見合をすることになりました。当時、「女性適齢期」はクリスマスケーキ(25 日まで商品、26 日になると価値なし)と言われていたので相手方の両親も焦っていたのでしょう。

当日、会ってみて驚いたのは、彼女の「面差し」が「母親の若いころ」によく似ていたことです。残念ながら、双方とも初めての見合だったので、対応はぎこちなく、言いたいことも言えないまま別れてしまいました。しかし、彼女の容貌は印象に残り「もう一度会いたい」という気持ちは時間がたつにつれて強くなって来ました。

翌日「御付き合いをしたい」という電話を仲人さんにしようと思って電話機に近づいた将にその時、ニューヨーク支店から「小麦相場が暴落して、支店の利益が全部吹っ飛ぶかもしれない！すぐ帰ってこい！」という国際電話がかかってきました。

本社がニューヨーク行の航空券を手配してくれたので、その日のうちに伊丹に駆けつけ彼女に返事をする間もなく出国しました。帰社してみると支店には取引先や銀行からの電話が殺到していて、支店長も朝から晩まで、金策に走り回っています。しかし「幸い」と言うと語弊がありますが、翌週の火曜日から 2 日間、季節外れの豪雨が穀倉地帯を襲い、何万ヘクタールもの小麦畑が冠水すると価格は一気に持ち直し支店は危機を脱出しました。

帰任してから 2 週間後、私は彼女に「返事もせずに仕事に戻った失礼をお詫びします。もし許されるならお付き合いしたい」というエアメールを出しますと、二週間後に「承知しました」との返事がきたので、それからは文通を続け、翌年の正月帰国した時に結婚式をあげました。当時、父は助役にまで出世していたため、町の有力者や、副知事、県の局長も出席し、国会議員からの祝電も数多く披露され、「外国で活躍している郷土の秀才が結婚した」ということが、地方ではニュースになるのか「地方局」や「地方新聞」まで取材に来る騒ぎとなりました。挙式の翌日と翌々日あいさつ回りを済ませた私は、家内を連れてアメリカに戻りました。結婚した私は以前にもまして精力的に仕事に取組み会社の実績をあげましたが、出張続きで不在が多く、2 人の娘の子育ては家内に任せっきりとなり、家内にも娘たちにも「さみしい思いをかけ申し訳なかった」と、後悔しています。

・本社時代

支店着任から 10 年後、34 歳で副支店長まで昇進した私は満を持して東京の本社に戻ったのですが、意に反して総務課の係長に配属されました。仕事は官僚や政治家の接待で、事前に先方の都合を聞き、料亭やレストランを予約し、当日は饗応する

社長や重役に近侍し秘書役をします。料亭では重役と政治家の間で金品のやり取りが度々あり、もう時効ですから言いますが、当時の社長から総理にウラ金が渡ったこともありました。

私は税金で養われているくせに納税者にたいして偉そうにしている父のような役人が大嫌いでした。「世界を股にかけ、自分の腕一本で無から富を作り出してやる」というのが、商社に入った動機なのに、係長を続けるうちに「税金で養われている奴らがえらそうにし、養っている我々がペコペコして、違法な行為までしなくてはならないのか？」と、理不尽に思うようになりました。

不本意な思いを抱いて仕事に身の入らない私に上司は「会社経営の裏側をよく見ておけ」「重役になるには総務課や人事課など管理部門を一定期間必ず歴任しなければならない」と諭しましたが、どうもその頃から人生の歯車が狂い始めたようです。係長を２年程続けていくうちに、自分の若いころに描いていた夢がどんどん遠ざかるのを感じ、耐えきれなくなった私は会社を辞めて独立することを決心、上司が引き止めるのを振り切って退職しました。

・起業時代

退職した私は貯金をはたいて小さな貿易会社を立ち上げると、本社時代取引先だった工作機械会社の代理店となり、機械や機械部品のカタログを持ってアメリカに長期出張し、大学や支店時代の人脈を頼って営業を始めたのですが、大手商社にいた頃と違い誰も会ってくれません。当時のアメリカでは現地の工場と内外の大手商社ががっちりと結びついていて、新参者の入る余地など全くなかったのです。大企業の看板がなければ何もできない無力な自分を思い知らされましたが、それでも足掛け3年、粘り強く営業を続けました。

しかし、成果はまったく上がりません。貯えも尽きかけた頃、件の上司から「日本に戻って来て子会社の営業をしないか」と言う手紙が来ました。上司はアメリカの関連会社を通じて私の窮状を知っていたようです。独身の頃なら手紙を破り捨てたところですが、家内と娘二人の養育のため「これ以上不安定な生活はできない」と、泣く泣く会社を清算して子会社に入社しました。

・子会社時代

子会社とは県南の当地にある「建設機械・建設資材販売会社」のことで「一営業担当」になった私は、顧客のリース会社や建設会社に毎日御用聞きに伺います。新製品のカタログ持って行くこともありますが、中々商談は成立せず、新規開拓も進みません。

顧客のイベント(花見、起工式、忘年会)には酒の一本も持って参加し、カラオケ大会では下手な十八番を披露します。「信用金庫」に融資の相談に行く顧客に同行して窓口で何時間も一緒に頭を下げたこともありました。以前の私ならこんな田舎臭い営業はバカにしていたでしょうが、2年3年と続けるうちにだんだん慣れてきてなんとも思わなくなりました。

しかし、そんな中で一番つらかったのは、親会社で出世した「かつての同僚や部下」が「親会社の看板を背負って」子会社に来た時の対応でした。ニューヨーク支店や本社総務課にいた頃、私は常に自信満々で「誰でも努力すれば、ノルマを達成できる」と公言し、部下にはかなり高いノルマを強要し、達成できなければ「そんなこともできないのか」と叱責しました。

当時の部下たちにとって、私は「エリート意識の塊で、頭の高く、部下には困難な仕事を無理強いするひどい上司」だったので、立場が逆になると恨みを晴らす意味を込めて「意識してエラそうな口調で命令し」「無理なノルマを押付け」「書類の小さなミスをあげつらって何度も書直しを命じる」など、ことあるごとに意地悪をされました。何とか本社の要求にこたえられるよう、骨身を削って頑張りましたが、本社の押付けてくるノルマは期限内に達成できませんでした。

そのことを社長に報告に行くと、思いがけないことに、社長は

「かつての君の部下達が恨みを晴らすために無理を言っているだけで、本社は子会社の業績などまったく気にしていないから気にせんでもいい」

と、慰めてくれました。

思えば、年頭の社長訓示でも、

「毎年右肩上がりで業績を伸ばすなんて無理だ。赤字さえ出なければいい」「赤字が出ても翌年取り返せばいい」
などと事業に対する消極的言動が多く、トップに「事業拡大意欲」がないのに合わせて部下たちも「業績不振」に危機感を持っていません。

結局、業績のことでストレスをため込んでいるのは社内で自分だけだったことに気づき「こんなだらけた職場環境の中にいると人間が腐ってしまう」「こんなところで仕事を続けるのは嫌だ」と、会社に対して憤りを感じるようになりました。

・当地での生活

落ち込む話ばかり記しましたが、こちらに来てよいこともありました。

当地には妻の叔父夫婦が住んでいました。二人とも根っからの子供好きで、自分の子供が小学校を卒業してからも「みどりの小父さん・小母さん」として小学生の登下校を見守っており、地域社会から大変信頼されていました。

田舎ではよそ者が転居してきた場合、中々地域に溶け込めないものですが、叔父夫婦の近所への働きかけのおかげで、家族はすぐに定着し、家も安く借りることもできました。

子供が独立し、夫婦二人で暮らしをしていたところへやってきた「娘たち」を二人は孫同様に可愛がり、自宅で開いていた書道教室に入れてくれました。教室には近所の子供たちが沢山勉強に来ていて、すぐに仲のいい友達ができました。

支店・本社時代、起業時代、娘たちは父親不在の家庭が原因なのか「周囲の環境になじめず」「おとなしく」「引っ込み思案」でしたが、叔父夫婦の愛情と当地の豊かな自然環境、仲良しの友達のおかげで「海岸でカニや小魚を捕まえたり」「山で木登りや昆虫採集をしたり」するまるで男の子のような活発な子供に変わりました。

妻もかつて在籍した「地方銀行の支店」で「臨時職員」の職を得て「同僚」や「小学校のママ友」達とお茶会をしたり日帰り旅行に行ったりして楽しい日々をすごし、私も「支店時代」や「本社時代」に比べると仕事量はずって減ったので、定時に帰宅した時は家事を手伝い、「鍋を囲んで団欒する」など今までできなかった普通の家庭生活をおくることができるようになりました。

「母」や「妻の両親」も月に一度は、長距離バスを乗り継いで当家を訪れるようになり、我々も連休や盆、正月などは県北まで車を走らせました。

・転職の機会 1

家族が楽しい生活をおくる一方、一人でどんなに頑張っても沈滞ムードから抜けない会社を退職して、もう一度「外国」か「東京」で働きたい気持ちは年々強くなっていきました。

最初に転職の機会が来たのは当地に来てから 5 年目のことでした。

「当地の養殖会社」「県庁の水産課」「漁協」「県最大手のスーパーマーケット」が組んで、東南アジア一円に「地元産の高級養殖魚」を輸出し、その現地販売拠点をシンガポールに置くと、いう記事が地元新聞の一面に載りました。

それからしばらくして「養殖会社の社長」と「漁協の組合長」が、
「シンガポール事務所の所長になってくれないか」
と、私に頼みに来ました。

私は海外事業の経験・実績があり、今回の事業に共同出資する「シンガポールの食品会社社長」の名前を聞くと留学した大学の同窓生でしたので、久々に胸が躍りました。

しかし、「社長」は事業見通しについて、
「東南アジア諸国は、魚介類の輸入規制が多く、現地政府と交渉し、事業を立ち上げるだけで 2 年、軌道に乗せるまではさらに 5 年間は現地に滞在しなければならないだろう」
と、語りました。返事を保留して帰宅した私は夜遅くまで考え、悩みましたが
『この仕事を引き受けると「単身赴任」にしても「家族を連れ赴任」にしても、現地に 7 年間は滞在しなければならない。当地に来て「明るく元気になった娘たち」と「仕事に余暇に生き生きと過ごしている妻」に「単身赴任による父親不在」や「家

族ぐるみの海外移住」の辛さを体験させるのはやめよう』
と決心し、翌日「業者」に断りの電話を入れました。

・転職の機会 2

2 度目の機会はなぜかそれから 5 年後に訪れました。

ある日、自宅に保守党の参議院議員が自宅にやってきて、挨拶もそこそこに
「法学部卒で学科は違うが、東京大学校の同級生だ」「僕は大蔵省に入省し、課長に昇進。参議院の地元選挙区から立候補して当選。一期務めたが、今度は衆議院選挙に鞍替えするので、来年実施される選挙には出ない。後継者としてぜひ立候補してくれ」「君は学部を一番で卒業し、商社で大活躍したことはよく知っている。私の後継だし、党をあげて応援するから必ず通る。ぜひ決断してくれ」
と、早口でまくしたてました。
「こいつは必ず俺に従う」という自信に満ちた顔つきは、「一旦決めた計画は、ごり押ししてでもやり遂げる役人の強引さ」に「議員の尊大さ」が加わった醜悪なものでした。

私は自分でも信じられないくらい感情が高ぶり、彼を怒鳴り散らして家から追い出し、未練がましく玄関の外にいたところに台所から持ってきた塩壷の塩を力士ようにつかみ、思い切り投げつけました。

2 回目の転職話もこれで消えました。

・3 回目の正直

子会社に来て 15 年たち私も会社でナンバー3 の営業本部長に昇進していました。さすがにこれだけ長い間、当地にいるとその気風になれて少しは気長になったような気がしますが「この状況から抜け出したいという気持ち」は、収まることなく年々膨らみ、ストレスもたまる一方でした。

私には「ごく自然に自己管理ができてしまう」という能力があり、ストレスは無意識に心の底に封じ込めてしまうので、酒に逃げることやギャンブルにはまることはなく、もちろんＤＶもありません。

しかし、そうやって押さえつけていたストレスは顕在意識が眠り、潜在意識の闇が訪れる夜になると牙をむきます。当地に来る前は全くなかった「歯ぎしり」を毎晩のようにするようになり、時々金縛りにもあいました。仕事量も減っているのに肩こりも年々ひどくなってきました。

その年も押し詰まったころ「次年度から私を親会社の営業部長に採用する」という「破格の人事」が「取締役会で出て、承認されたという」連絡が本社からありました。5 年周期でやってくる転職機会も 3 度目の正直です。

本社の重役たちは子会社で汗まみれになり頑張る自分を見てかわいそうに思ったのか？お荷物になっていた子会社の業績が徐々に回復してきたせいなのか？いや違います。私が子会社に就職した時ただ一人お祝いに駆けつけてくれた元同僚で同期のＣが執行役員になり「取締役会で強く私を推薦してくれた」のがその要因でした。

支店や本社時代の私は、多忙な時には「上司の酒の誘い」も断るような孤高の人間でした。しかし、Ｃはなぜか彼は私を気にいっていて、何度断わっても飽きもせず「飲み会」や「ゴルフコンペ」に誘ってくれるのです。私はＣを凡庸な男だと見下していたのですが、誘いに根負けし、仕方なく付き合う内に、お互いの悩みを話すようになり、社内で心を許せる唯一の友人となりました。

私ももう 55 歳、最後のチャンスです。子会社で地道に学んだ営業力を本社で発揮する時が来たと久しぶりに喜びました。娘たちも無事就職し、妻も「今まで私たちのためにずっと我慢してくれてありがとう。東京に行って大暴れしてきて」と背中を押してくれました。

しかし、そのようやく攫んだチャンスを打ち砕くように病魔が襲ってきたのです。

・病気の兆候

最初の兆候はその年の夏ごろから起き始めた「小さな物忘れ」でした。私は前述したように記憶力には絶対的な自信があり、何年も前の会議の内容や出席メンバーも覚えていますし、得意先の住所や電話番号もすべて暗記していたのですが、時々それらを忘れるようになりました。

「年のせいか？」と思っていたのですが、11 月中旬のある日営業に出かけるために車に乗ったところ、なんと「キーを差し込んで回しエンジンを始動すること」が思い出せません。「どうすればいいんだ」と一生懸命考えるのですが、嘘のように記憶が無くなっています。その時は 10 分くらいたった時に記憶が戻って来て無事出発できたのですが、それから数日後、部下とレストランで昼食をとった時でした、食事が終わって車に戻ったところまた記憶が無くなりました。運転席に座ったまま何もしない私を不審がる部下に「ちょっと眠いから代わってほしい」と助手席に移り、車が動き始めてしばらくするとキーの操作を思い出しました。

また、事務所で部下から自分の名前を呼ばれていたのに気付かないこともありました。近くに来て私の名前を呼んでいるのに分からないのです。その時は「疲れると記憶がなくなることがあるんだ」と無理やり自分を納得させました。

しかし、本社採用の内定通知が来た一月後の 1 月下旬のことでした。私は何と家内の顔と名前を忘れてしまい、部屋に入って来た家内に

「あなたは誰ですか？」

と、聞いてしまったのです。

・病気の診断

私はようやく「これは年のせいではない明らかにおかしい」と思い、妻と総合病院の「物忘れ外来」を尋ね、いろいろなテストや検査を受け、翌日には脳のＣＴも撮りました。

一週間後に出た診断は、

「あなたは認知症にかかっている。今後、徐々に認知機能が落ちて行き、記憶力、思考力が段階的に減少する。今後病状が改善することはなく、薬を飲んでも症状の進行を少し遅らせるだけだ」

と、いう絶望的なものでした。あまりの衝撃の大きさに頭が空白のまま妻の運転を代わってもらい家に帰り、椅子に座ると絶望感がこみ上げてきて、生まれて初めて嗚咽を漏らしました。

「今まであなたが私や子供たちのために頑張ってくれたから今度は私がしっかり介助するわ」

と妻が慰めてくれる声を遠くから聞こえてくる音のように感じていました。

その日、私は一晩寝ずに自分の行く末を考えました。夜明け近くになり「自分の症状が進むと会社に必ず大きな損害を与える」「二人の娘はもう就職していて養育の心配はない」ことを理由に「仕事をやめる」決心をして、辞表を書きました。

・退職

そのまま、一睡もせずに出社すると辞表を社長に提出し、朝礼では病気のことを同僚に正直に話し、

「引継ぎが済んだら直ちに会社を去る。武士の情けで黙って見送ってくれ」

と、別れの挨拶をしました。

翌日から仕事の「引継ぎ」を行いましたが、15 年分の引継ぎに 3 日間もかかりました。最終日にはＣが本社から駆けつけてきて、私を見つけると

「なんて残酷な仕打ちなんだ、こんな悲劇があるか！」

と、泣き始めたので、

「仕方がない運命だ。君が来てくれたことに感謝する」

と、礼を言うと

「今後も力になるから」

と、肩を落として帰ってゆきました。

翌日から今までの生活が嘘のように空虚な日々になりました。外出するのは月 2 回医者に行く時だけであとは家で所在なく過ごしていましたが、その間にも病状は進み、一日の内何時間かは「空白の時間」が出来て、日に日にその時間が増え「空白の時間」中に「タンスの角に思い切り頭をぶつけ大きな瘤ができたり」「縁側から庭で転倒して手首を骨折したり」したので、私の動静に一日中気を付けなければならない妻の介護負担も増えてきました。

・デイサービス通所

「勝手に外に出て家の周りを徘徊したり」「大小便の失禁を度々するようになった」のを機に、デイサービスにかかることを決め、市役所に行き手続きをして、昨年の 11 月から「弥生苑」に通い始めました。ここでは昼食と入浴以外の時間は希望すればいろいろなプログラムが受けられますが、私はしたいことも特にないので、図書室の本を読んで過ごしていました。閉鎖的な性格のせいで利用者の皆さんと積極的に交流もなく、私を父と錯覚して慕ってくれるＢさん以外に友達は出来ませんでした。彼女は一日中まとわりつくわけでもなく、話し方も上品なのでお話ししていても苦にならないところが気に入っています。

・運命の日

通所開始から 2 か月がたった頃、突然、運命の日がやってきました。

その日、私は図書室の書架に並んだ単行本の陰に隠れていた小さな文庫本「山月記」(中島敦作)を見つけました。目次を見ると大変短い小説なので「認知症の闇が訪れる前に読み切ることができる」と思い。読み始めました。文章中に難しい漢字熟語が多く、最初はなじみにくかったのですが、しばらく読むうちに、どんどん引き込まれ、一気に読み終えた途端、体の中から湧き上がってきた感情が「泣声」と「涙」となってほとばしり出ました。

同じ「性格」で非常によく似た「人生」を歩んだ「小説の主人公」に出会ったことが、私の感情を爆発させたのです。

・李徴の人生

彼の名は「李徴」。唐代、現河南省付近の生まれです。

子供の頃から評判の秀才で、若くして科挙に通り、エリート役人として高い官職を得ながら、他人に同調できない自尊心の高さから退官し、詩人の道に進むのですが、文名は一向にあがらず生活が苦しくなったことから、妻子を養うために節を屈し「地方官吏」の職を得ますが『自身が見下していた「かつての同僚」からの命令を黙って聞かなければならない』という屈辱的な境遇に陥ります。

李徴は心の中に「自分には才能があるという」自尊心と「自分に本当に才能がないのではないか？」という「不安」を併せ持っていたのですが「才能のあるなし」をとことん「見極めること」をしませんでした。なぜなら「自分の実力を見極めると才能がないことが分かってしまう」ことが恐怖だったからです。

このような「尊大な羞恥心」は一般の人間には存在しない「異常な心理」であり、それがどんどん増長した結果、外見がけだもの(虎)に変わってしまったというのです。

そして、変身後は何時も「動物の本能」で行動するのではなく、時々「人間の心」が蘇り「本能に任せて小動物を襲ったこと」などの所業を悔いて懊悩し、時間がたつにつれて「人間の心の時間」より「動物の本能の時間」が増えてゆくことに恐怖感を覚えるのです。

・私の人生

私も地元では評判の秀才で、進学校での成績もよく「東京大学校」に入学し、卒業後は「一流商社」に入社します。「ニューヨーク支店」「東京本社」とエリートコースを歩みながら、部下を見下したり、達成不可能なノルマを命じた挙句、「仕事が自分の意のままにならない」という理由で退職し、起業したのですがうまくいかず、妻子を養うために会社をたたんで、地方

の子会社に就職しますが、親会社で出世した元同僚からは「さげすまれ」「いじめられ」られ、地方の子会社で働くことに不満を持ちもう一度「東京」や「海外」で働きたいという未練をずっと持ち続けます。

・二人の比較

李徴は心の中に「自分には才能があるという」自尊心と「自分に本当に才能がないのではないか？」という「不安」を併せ持っていました。

私も「エリートとして歩んできた半生」から得た「自尊心」と「失敗すると自尊心まで失ってしまう」と、いう恐怖心を合わせ持っていました。

李徴は「自分には本当に才能がないのではないか？」という恐怖心が「尊大な羞恥心」を生み、それがどんどん増長した結果、外見がけだもの(虎)に変わってしまいました。

私は「自尊心を捨てられないこと」が「欲求不満」を「過去を全て捨てゼロからスタートできない臆病さ」が「自己嫌悪」を生み、それらがストレスとして蓄積されたことが、認知症の発症原因の一つになったのではないかと思っています。

虎に変身した後も「けだものの本能」と「人間の心」を併せ持ち、前者が日に日に増えていくことに苦悩する「李徴」と「認知症」のため「思考力や認識力などが停止した状態」と「本来の思考力や認識力が戻った状態」を繰り返し、前者が日に日に増えてゆくことに恐怖を感じている「私」の状況は大変よく似ています。

さらに驚くべきことに「山月記」には「虎に変身した李徴」を心配し、話を聞いてくれる同期生である無二の親友まで登場するのです。

・文化祭

私は「彼に会いたい、彼にあって、語り合いたい」と心から思いましたが、彼は小説の中の人物で、対面などできるはずがありません。その現実は私をとてつもなく悲しくさせ、大泣きした後は長い間うなだれていました。

やがて、昼食が出来たことを知らせるアナウンスが聞こえてきたので顔をあげると壁に貼ってあった「弥生苑文化祭」のポスターが目に留まりました。

「催物のプログラム」の下には、

昨年地元から寄付され、苑内に移築再建された「登録有形文化財の公会堂」。ここには「袖」と「楽屋」のついた舞台があり、今年の「文化祭」はここで行います！！皆さんも舞台俳優になったつもりで頑張りましょう！！

と、特記されています。

「文化祭、文化祭、文化祭・・・」私の頭の中に中学・高校の文化祭の光景が浮かびました。機能がマヒしつつある頭脳がおそらく人生最後と思われるアイデアをひねり出しました。

「李徴とあって語り合う」唯一の方法は「弥生苑の文化祭で山月記の劇を上演し、私が主人公李徴を演じること。つまり私が李徴になってしまうのです」李徴の気持ちを存分に知り、李徴と心の交流をするのはこの方法しかしかありません。

自分の半生を長々と述べてきて、ようやく「私の要望」にたどり着きました。どうか別紙の「お願い」をお読みいただき私の要望を実現していただけるようお願いいたします。

添付資料 2

御願い

弥生苑施設長　様

A（利用者）

いつもありがたいご支援感謝します。どうか、私の願いを聞いてください。「私の半生」を御読みいただき、ご理解していただけると思いますが、私は彼（李徴）と心の交流をしたいと思っています。

そのための方法は「山月記の李徴を演じること」以外ありません。

文化祭まであと 1 か月しかなく、プログラムは既に決まっていることは重々承知の上で申し上げます。
何とか時間をとって山月記を上演し「山月記の李徴」を演じさせてください。

自分の脳は正常な機能をなくしつつあり、空白の時間が増えて、いつ「完全な虎（とら）」になってしまうかわからない状況で一刻の猶予もありません。

拙いながら台本も用意しました。施設長様どうか私の望みをかなえて下さい。どうかよろしく御願いいいたします。

第２部　ビデオ上映

舞台には観客の目を遮るように薄が壁状に設置している。

袖の中から「御主人様、この峠は人食い虎が出るそうです。出発は日が昇ってからの方がよいです」という袁傪の従者の声が聞こえ、それに応えて「もう東の空が白んでいる。虎はねぐらに帰ったから大丈夫だ」という袁傪の声がする。

「車椅子に前に棒が突き出され、馬の絵を張り付けた馬車を模した乗り物」が上手から登場。

中国服を着た男性(李徴の友人で役人の袁傪)が座って、黒子が後ろから押してくる。

突然、下手から虎(横縞のシャツ、横縞のズボンを穿き、虎の御面をかぶっている。口の部分は大きく半月形に開いている)が飛び出し、「ガオー」と叫んで襲いかかろうとするが、急に停まり、薄の壁をかき分けて裏に入る。「危ないところだった」「危ないところだった」という声が繰り返し聞こえる。やがて薄の後方からあまり明るくないスポットがあてられ、岩の上に乗った虎のシルエットが浮かび上がる。

・袁傪(えんさん)

・・・その声に聞き覚えがある。・・・もしかして、君は李徴君ではないか？

(弥生苑の聴覚障害者のために、セリフは発言と同調して、舞台後ろのスクリーンにパワーポイントにより映し出される)

○

○

・李徴　(小さな声で)いかにも自分は李徴である。

○

・袁傪　久しぶりだな。李徴君、どうして隠れている。ここへ出てきて語らないか？

○

○

・李徴　残念だがそれは無理だ。自分の姿は虎に変わってしまっている。その姿を見せても君が恐れるだけだ。できればこの叢の中にいて君と話がしたいのだが。

○

・袁傪　分かった。それでよい。ゆっくり話をしよう

照明を暗くし、袁傪が両手を広げたり、頷いたり、腹を抱えて笑うしぐさをパントマイムで演じ、話しているうちに時間が過ぎていくようすを示す。

○

○

・袁傪　ところでなぜ君は虎の姿になってしまったか、教えてくれないか？

○

○

・李徴　・・・今から一年ほど前のことだ、旅に出て汝水のほとりに泊まった夜、戸外から呼ぶ声に引かれて外に出て、声を追って走っているうちに虎に変わってしまったらしい。気が付いたのは明るくなって谷川にうつる自分の姿を見た時だ。

驚いて後ずさりした時、目の前を横切る兎の姿を見た。途端、けだもの心が目覚め、人間の意識はなくなった、気が付くと口は兎の血にまみれていた。

それ以後、一日の内、何時間かは「身も心もけだもの」として生き、残りの時間は「容姿はけだもの」でも「心は人間」として生きている。

しかし、「人間の心で生きる時間」は日に日に少なくなっている。やがて私の心の中の人間性は完全に失われ、身も心も「けだもの」になるだろう。私とってその方が幸せなのかもしれない。

しかし、そうはいっても「日に日に人間の心でいる時間が減っていくこと」はこの上なく恐ろしいことだ。

○

○

底なし沼に沈んでいくのに手足も動かず、助けくれる人も来ない。

足から胴から首、口、目と徐々に沈んでゆくのになすすべもない。

やがて、頭の先まですべて泥に沈み自分の痕跡はこの世から消えてしまう。

これほど恐ろしい事は私と同じ境遇になったものしか分からないだろう。

○

○

私は詩人として名をあげたかったのに、その願いを遂げる前にこのような「けだもの」に変わってしまった。

しかし、こんなあさましい身になっても、自分の詩集が長安の有名詩人の机の上に置かれていることを夢見ている情けない男だ。

○

私は子供の頃から郷里で知らない者がない程の秀才だった。

何千倍の倍率の役人採用試験に若くして合格した自尊心もあった。

そんな名誉ある役人の道を捨て、世俗を離れた「詩人」として大成することを目指したが、進んで「詩の先生に入門すること」や「詩人仲間と競って勉強すること」はしなかった。

そんなことをすると先生や詩人仲間に「本当は自分に詩の才能がないこと」がばれてしまうことが怖かったのだ。

しかし、私よりもっと才能がないのに一生懸命努力して自分の殻を破り有名な詩人となった人も沢山いる。

私は小さな見栄にとらわれて、初心に帰り努力することを怠った。

○

「自分には詩の才能がない」と割り切り、詩とは縁のない「俗人」とつき合えば、それはそれで楽しかったかもしれない。しかし、自分には「無学な俗人と付き合うことは恥ずかしい」という「羞恥心」もありそれもできなかった。

自分勝手な理由で「人付き合い」をやめ、孤独な生活に入ってしまったことが「夫として」「父として」私を慕ってくれる家族を苦しめることになり、私のことを心配して、忠告したり、援助してくれる友人も傷つけた。

そんな「ひどい行い」の報いにより私は「けだもの」になってしまったのだ。

(嗚咽を漏らす)

○

○

袁傪君、君に一つだけお願いがある。それは故郷にいる妻と子のことだ。

妻と子はまだ私の帰りを待っている。もちろん、主人であり父親であり、人間である私をだ。

しかし、こんな猛獣に変わってしまっては家族を養うことはできない。・・・それは心をかきむしられるような・・・つらい現実だ。(言葉が途切れがちになる)

君が故郷に帰ったら家族に「自分は死んだと」・・・告げてほしい。そして厚か・・・ましい御願いだが、彼らが・・・飢えないように援助・・・してやって・・くれないか。

・袁傪　分かった約束しよう。君の家族は飢えさせることは決してない。

君の子供の父親代わりとなって、成長して独り立ちするまでしっかり養育しよう。

・李徴　(泣きながら)ありがとう。そうして・・・いただければ、私・・・は何も思い残すことはない。

本当はまず・・・妻子の保護を・・御願いすべき・・・なのに・・自分の詩のことを・・・・・

長々と話すなど・・・こんな自分・・勝手な人間だからこんな・・・けだものに・・身を落と・・すの・・・だ。
徐々に言葉のつながりが悪くなりついにはセリフが停まってまってしまう。これ以降「セリフの文字」だけがスクリーンに映される。

○

○

・文字(李徴)　もう夜明けが近い、間もなく自分の心は完全に虎になり、君を襲うだろう。
急いで馬車を出せ。停まらずに行くのだ。
そして、この道は二度と通らないでくれ、君を餌と思って襲いかかるかもしれないから

○

・文字(李徴)　ここから百歩ほど先には丘がある。丘に着いたら、馬車は停めなくてよいから、こちらを振り返ってもらえないか。その時こそ、自分の醜悪な姿を見せよう。
さあ、早く、早く行ってくれ。もう虎の気持ちに変わりそうだ。御願いだ！急げ！！

○

○

・文字(袁傪)　李徴君、君が変身した虎の姿を目に焼き付けておこう。それがたとえ獣であれ私の最愛の友であるのだから。・・・さようなら李徴君。

○

袁傪の乗った馬車がスタッフに引っ張られて上手の袖に入る。10 秒くらいして薄の壁が二つに分かれ、張りぼての岩に正座し、両手をついた虎が出現。いつの間にか両手首に舞台の上に延びる紐がつけられていて、それが引っ張られ両手が上がる。

○

スクリーンが上がるとそこに「がおー」という文字が朱墨で大きく書かれた同じ大きさの紙がある。

○

幕が引かれる―(拍手)

第３部　演出の裏話、後日談

・「カントク」の観察

「カントク」はテレビ局時代「ドキュメンタリー」の演出に素晴らしい才能を発揮しました。
私も「カントク」の実績はよく知っていて、当苑に入所された頃「よいドキュメンタリーはどうやって作るのですか？」と、質問したことがあります。

「それは観察だ」「対象をしっかり観察していると、頭の中に自然と物語が出来てくる。後は流れに乗って撮るだけだ」と即答されました。

今回「カントク」は舞台作りの合間に、こまめにＡさんのもとに足を運び「一言二言話しかけたり」「見つめあったり」「何も言わず少し離れたところからじっと見たり」しながらメモを取っていました。

今から考えると自分が納得いくまでＡさんを観察していたようです

Ａさんが作ってきた「仮台本」も一枚一枚じっくりと読み込み「文章の横に引いてある線が筆圧で自然に太くなっているところがあるな」「涙が乾いた痕や」などと呟やきながら、やはりメモを取っていました。

「カントク」はＡさんが「御願い」の中に書き記した「上演動機」＝「李徴と心の交流をしたい」以外にもう一つ「隠された動機」があることをちゃんと見抜いておりました。

それは、「自分を支えてくれた家族への思いを舞台上から伝えたい」ということです。
「カントク」は「Ａさんの「精神的持続力が何分くらいあるのか」を十分考えて、時間内ギリギリのところで「家族への言葉」語らせることに成功しました。
「家族の幸せを願う気持ち」が伝わった奥様と２人の娘さん、元同僚の執行役員はこらえ切れず涙を流していました。

・隠し玉

芝居の最後の方で「Ａさんの持続力」が途切れてセリフを話せなくなった時、私は「あかん！劇が停まる」と胸がどきどきしたのですが、実際はそんなことはなく、ごく自然に劇は進んでいきます。

それは、最初からずっと「聴覚障害者用の字幕」が映し出されていたせいで「セリフが急に無くなり字幕だけになっても」違和感がありません。

それどころか、「李徴と袁傪」の「お互いを思いやる気持ち」が「心から心へ」伝わるようで「いい感じ」に思えました。
袁傪役の私の「最後のセリフ」もカントクが、舞台の袖から「話すな！」と指示してきたので、字幕だけになりました。

ところで、本番の前日、許可を得てヘルパーと外出したカントクは模造紙に包んだ筒のようなものを持って帰ってきました。
ヘルパーには「明日の演出に係ることだから」と固く口止めしたようで、私が聞いても「どこへ」「何をしに行ったか」教えてくれません。

後でわかったことですが、どうやら古巣のテレビ局の小道具係に会って、書道パフォーマンスに使う大きな筆を借り、夜になって「スクリーンと同じ大きさの模造紙」に、朱墨で「ガオー」と書いて壁に貼り、スクリーンを降ろして隠したようです。

「ガオー」について「カントク」は「演出人生最後で最高のセリフだった」言っていましたが、実際は「カントク渾身の字幕」だったのです。

上演の翌日、「カントク」は劇の録画ビデオを見ながら

「前半のセリフを少なくすれば、Ａさんの家族を思うセリフは余裕で全部言えたのにな」「虎をもう少し早く出したら自分で手をあげられたのに」「よかったよ。Ａさんがんばったよ。Ａさんだから出来たんや」

などと「ダメ出し」をしていたので、

「来年の文化祭でも劇の演出をしませんか？」と聞いたところ、

「これが人生最後の演出だと思っていたけれど、本音を言うとまたやりたいな」

「演出家なんて、多分死ぬ間際まで作品のことを考えている。因果な商売や」

と語っていたのに、その 10 日後、糖尿病からくる急性心不全で急死されてしまいました。
本当に残念なことです。

・記念写真

ビデオをご覧になって、皆様はどのような御感想をお持ちでしたでしょうか？
あ、うっかり忘れるところでした。最後に写真を一枚映しますのでご覧ください。電気を消して下さい。
暗くなった部屋で、再びビデオのスイッチを入れると、
「虎の面をとり放心した顔のＡさん」を中心に右に「カントク」左に「Ａさんの家族」が座り、観客、利用者、職員全員がＡさんを取り囲み、ＢさんはＡさんの前に寝そべって顔をこちらに向けピースサインをしている「記念写真」が映される。
この記念写真は幕が下ると、すぐにＢさんが大声で「カーテンコール」と叫び、幕が開くと会場にいた全員に呼び掛けて舞台に上がりＡさんを囲んで撮った写真です。

・Ａさんのその後 1

現在、Ａさんは認知症の症状がかなり進み、介護認定も重くなり、週 6 日間、苑に来られています。
文化祭直後は、毎日のように「劇のビデオを見たい」と言わたるので、パソコンで録画をお見せしたのですが、最後までじっと見ている時と途中で集中力が途切れて目を反らせてしまう時がありました。
最近は自分を認識している時間がほとんどなくなり、ビデオの視聴希望もありません。
苑ではテレビを見たり、居眠りをしたりして過ごされていますが、時々「山月記」のセリフを独白されることがあるので、その時は私がお相手するようにしています。
二人きりの劇が始まると、気配を察したＢさんがどこからともなくやってきて鑑賞し、言葉が途切れると、
「えー！もう終わりなのつまんない」
と落胆しながらも
「次はいつお芝居するのかな？」
と、楽しそうにＡさんに聞いたりします。
苑ではこのように「ほのぼのとした時間」を過ごしておられるＡさんですが、御家庭では、認知症の症状悪化に伴う重大な問題が起こっていました。

・Ａさんのその後 2

一月くらい前から、帰宅され、夜になると、決まってドアを開けて外出しようとするそうですが、10 日前「家族が目を離した隙に外へ出て踏切の前まで行き、じっと立っていたこと」があったので、それ以後、奥様がドアに鍵をかけ外に出られないようにされていました。
しかし、5 日前夕食が終わり家族でテレビを見ていた時、急に立上り、ドアに近づくと、すごい力でドアノブをへし折り、ドアを蹴飛ばして開け、外へ出て行っていってしまったそうです。
その時の表情は今まで一度も見たことがない怒りに満ちたもので、奥様と次女様はあまりの怖さに呆然としてしばらく体が動かず、ようやく気を取り直して外に出ると「車の往来の激しい交差点を赤信号なのに横断しようとしているところ」だったので、飛びついて引き留め、偶然通りかかった生協の配達員に手伝ってもらって家に連れて帰ったということでした。
この話を聞いた時、私は「山月記」の御芝居で「李徴が宿の外から聞こえる何者かの声に引き寄せられ外に出て走り出し、虎に変わってしまったこと」を思い出して慄然としました。

・Ａさんのその後 3

奥様の希望で一昨日、奥様、次女様、私、担当支援員、ケアマネージャーを交えて支援会議を行いました。これはその時の

奥様の話です。

主人がドアノブをへし折って外に出て行った時は「狂暴」という言葉が最もふさわしいほど怖い顔をしていました。

私は「山月記」の「人間が虎になる」という話は「絵空事」と思っていたのですが、あの夜の主人の顔を見ると「本当のことではないか」と、さえ思うようになりました。

でも、翌朝、起きてきた主人の顔には涙を流した痕がありました。

私を見つめる充血した目は「李徴は袁傪に『家族には俺は死んだと伝えてくれ』と言っていただろう、私も同じ気持ちでいることをどうして察してくれないのか」「早く入所施設に入れてくれ、御願いだ」
と訴えているようでした。

「役人の地位を得ながら組織になじむことなく退官して、詩人を目指す」という「李徴さん」の行動はわがままで自分勝手に思えますが、私は「詩人にはなったが名声を得られなかった時」も「虎になってしまってから」も家族のことを第一に考える愛情あふれる「夫」であり「父」であったと信じています。

私たちは劇で示された主人の意図にもっと早く気付くべきでした。

こちらの法人が運営されている入所施設に主人を入所させて下さい。お願いします。

○

奥様のご意見に対して私も助演男優？として一言申し上げました。

李徴と別れる時、袁傪は、
「君が変身した虎の姿を目に焼き付けておこう。それがたとえ野獣であれ私の最愛の友であるのだから」と言いますが、このセリフは原作にはなく「カントク」の創作です。

「カントク」は、
「Ａさんが入所施設に入っても忘れないでほしい。本物の虎と違い襲って食べたりしないから、会いに行ってあげてね」
と言いたかったのではないでしょうか？

御自身を責めることはありません。入所されたら、私どもが責任をもって御主人のお世話をさせていただきますので、いつでもお顔を見にお越し下さい。

○

最後は手前味噌になってしまいましたが、以上で発表は全て終わりです。大変長くなってしまい申し訳ありません。会場の借用時間も過ぎたようですので、今回の報告会はこれで終了し、御質問は次回の報告会の折に受けたいと思います。本日は本当にありがとうございました。（拍手）

参考文献：「岩波文庫　山月記・李陵　他九篇」　岩波書店
：「ぜんぶわかる　認知症の辞典」　成美堂出版　2016 年